

—世界を読み解く英語の力—

1月に文科省から4年生教職課程設置の認可を受け、本学教員養成センターは本格的活動を開始しました。地域社会の教育に貢献できる人材育成を目指して、本センターの活動を一つ一つ積み上げていきたいと思えます。

「英語教育リレー随想」は、本教員養成センターの担当者が見つないでいくリレーエッセイのページです。今回は、「世界を読み解く英語の力」と題して、私たち日本人にとって英語とは何かについて（しばし「教室」を離れて）俯瞰してみたいと思えます。

言うまでもなく、英語は言語でありコミュニケーションのツールです。英語でコミュニケーションできたときの喜びはだれにとってもとても大きいものですが、文化を超えて世界の様々な人を相手にしたコミュニケーションには、日本人にとって思わぬ落とし穴が待っていることも知っておかなければなりません。昨今、日本の政界・財界のトップが発した英語のフレーズが意図せぬ誤解を招いてしまった事例が相次ぎ、国内外で論評が繰り広げられています。

昨年11月の日米首脳会談で普天間基地移設問題に関して日米の言い分は大きく隔たっていました。米国側が2006年に日米で合意した辺野古への移設の迅速な実行を求めたのに対して、日本側は政権交代を盾に新たな移転先の検討を提案しました。その場で鳩山首相が英語で発したのが“Trust me.” この“Trust me.”はその場の事態收拾には貢献したものの、日米間の考え方の隔たりを温存し、やがては言葉の意味とは裏腹に米国の不信感を招く原因になりました。米国は、日本の総理大臣が責任をもって（辺野古への移設を）行うから信じてほしいと言っていると理解。一方日本側は、総理大臣が責任をもって（今後辺野古の代替地を探す）努力をするから信じてほしいと伝えたはず、と考えています。

この行き違いの原因は言うまでもなく文化の違いにあります。日本文化はコンテクスト（文脈）に大きく依存する文化ですが、欧米の文化は言語化されたメッセージに大きく依存する文化です。エドワード T ホールは、前者を高文脈文化（High Context Culture）、後者を低文脈文化（Low Context Culture）と呼んでいます。本事例において、米側にとってはすでに合意された辺野古移設案こそが trust の対象。一方、日本側は代替案に漕ぎ着けられるよう努力するから信じてほしいと、いわば暗黙案の了解を求めたと考えられます。

同じような出来事がつい最近もありました。2月、リコール問題についての英語会見でトヨタ社長が述べた“Please believe me.”がそれで、これも“Trust me.”と同種の誤解を招く発言といわざるを得ません。曾野綾子氏は産経新聞のコラム（2010年2月10日朝刊13面）で「多分日本人とは違う文化と意識が存在することを認識すること」が大切であるとし、両者にはこの認識が欠けていたことを指摘しています。

英語を学ぶことは、「日本人とは違う文化と意識」を学ぶことに他なりません。このことを学ぶことができれば世界の出来事を正しく読み解くことができ、社会とかかわりを持ちながら効果的にコミュニケーションをしていくことができます。“Trust me.” や “Believe me.” が与えられたコンテキストの中でどのような意味を持つのかについては、直訳や和訳を超えた理解が必要であることは言うまでもありません。このあたりに、生徒たちが英語を学ぶ喜びと、教師が英語を教える醍醐味があるのではないかと私は考えています。